

「個（人間）」の理解のための「聞き書き」を取り入れた演習の評価

Evaluation of the program for nursing students that incorporated the “listening and writing down” method to understand each individual

川崎 千恵* 横関 祐子 堀内 和子 塚田 ゆみ子 久米田 実華

長野保健医療大学 看護学部 看護学科

要旨:【目的】「聞き書き」を取り入れた演習プログラムが、学習目標「地域の生活者としての個を理解し、個別的な看護実践を行う力を養うことができる」を達成するために適切な方法であったのか評価することとした。【方法】「地域・在宅看護学Ⅱ」を履修する学生 81 人（回答率 97.6%）の「評価アンケート」とリフレクションペーパーを評価方法に用いた。アンケートは単純集計を行い、リフレクションペーパーは学生の学びや気づきを質的帰納的に分析した。【結果】アンケートの結果、有用性や必要性について約 8 割の学生が肯定的に捉えていた。リフレクションペーパーの分析の結果、学生の学びや気づきは、2つのテーマ〔「個」の理解〕〔看護観の深まり〕に分類された。【結論】学生の学びや気づきの内容から、演習プログラムは学習目標を達成する方法として適切だったと考えられた。「聞き書き」を取り入れた演習は、時間的連続性のなかで経験を積み重ねた人生史を有する「個」を理解し、個別的な看護実践能力を高めるうえで、有用な教育方法と考えられた。また、グループワークでフィードバックをもらうことで自己の行為を振り返り、経験学習が行われた可能性が考えられた。

キーワード：聞き書き、教育評価、地域在宅看護学教育

1. はじめに

かつてない少子高齢化社会が進む中、わが国では、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、自助・互助・公助・共助による地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築が推進されている。地域包括ケアシステムの構築に関わる看護職は、地域に暮らす人びとを病や障害を抱え医療者による治療やケアを受ける「患者」としてではなく、一人ひとり異なる「個」として捉える必要がある。一人ひとりの現在の姿は、これまでの人生の延長線上にあり、様々な人生経験や生活背景、生まれ育った地域や家族と共有された文化、出会った人々の影響などによって形成されている。そのような存在である、生活者としての「個」と

してとらえ、その人が住み慣れた地域で望むケアを提供することが重要である。

看護基礎教育においても、2022 年度の入学生から適用される第 5 次のカリキュラム改正では、療養者を含めた地域で暮らす人びとを対象と捉える趣旨を明確にするために、「在宅看護論」が「地域・在宅看護論」へ名称変更され、単位数を増やすことで、地域で暮らす人びとの理解と地域で行われる看護についての学習が強化された¹⁾。地域に暮らす人びとの理解と個別的な看護実践を目指した教育内容の充実が求められている。本学では、地域に暮らす人びとの生活を支える看護職者の育成を図るために、2019 年の看護学部新設時より「地域で学び、地域を学ぶ」を教育理念に掲げ、「地域・在宅看護学」を 1 年次より開講してきた。著者らは、2019 年度から 2020 年度までに行なった「地域・在宅看護学Ⅰ」（1 年前期・必修科目）、「在宅看護論概論」（2 年後期・必修科目）、「公衆衛生看護学概論」（2 年後期・選択必修科目）の授業評価結果から、「地

*e-mail: kawasaki.chie@shitoku.ac.jp

（受付日：2021 年 12 月 22 日／受理日：2022 年 4 月 28 日）

域で暮らす生活者としての人(個)の対象理解」を学生(3学年)の課題と考えた。そこで2021年度、「地域・在宅看護学Ⅱ」(3年前期・必修科目、2単位15時間)において、「地域の生活者としての「個」を理解し、個別的な看護実践を行う力を養うことができる」ことを目標の1つに掲げ、ナラティブ・アプローチの一つである『聞き書き』を演習に取り入れた。

ナラティブ・アプローチは、「臨床を「語り」と「物語」という視点から眺め直す方法」とされている²⁾。また、『聞き書き』とは、「語り手の話を聞き、それをその人の『話し言葉』で書いて、活字にして後世に残すこと」³⁾であり、『聞き書き』の歴史を辿ると、「日本聞き書き学会」が2000年に札幌で発足している⁴⁾。発足の背景には、北海道の開拓に従事した人たちが老齢化し、今のうちに聞いておかなければ、開拓時の体験についての話が永遠に歴史の闇に消えてしまうということにあった。その後、次第に全国に広がり、最近では患者の語りを治療に役立てようと、医療・保健機関を中心とした『聞き書き』の活動も行われており、「砺波総合病院(看護師によるボランティア活動 砺波市)⁵⁾」、「二ノ坂クリニックボランティア(福岡市)⁶⁾」、「NPO 白十字ボランティアの会(東京・新宿区)⁷⁾」などが活動を行っている。ナラティブ・アプローチは教育方法として用いられているが、看護の大学・大学院教育でナラティブ・アプローチの一つである『聞き書き』を教育方法として導入し、方法を確立している大学はまだ数は少なく、福岡女学院大学(公衆衛生・在宅看護学領域)、富山大学大学院(大学院がん看護専門看護師課程)などがある。小田は、『話し言葉』で聴いたことを書くと、その人らしさが表れ、その本のなかで、語り手はいつまでも生き続ける」とし、『聞き書き』を行うことが「その人らしさ」の理解につながることを述べている³⁾。看護学教育に『聞き書き』や「Life History Interview」(以下、LHI)を取り入れた教育方法や学生の学びなどに関する報告が複数みられ、医中誌(Ver.5)にて「聞き書き」「生活史」「ライフヒストリー」「看護教育」で過去10年間の文献を対象に検索すると、30件が該当した。LHIは、「高齢者の過去から現在までの体験や生活歴史を、時間軸に沿って語ってもら

うもの」⁸⁾とされる。『聞き書き』やLHIを基礎看護教育の演習や実習の中で取り入れることにより、学生自身の対象理解が深まる^{9,10)}、聞き書き対象者の肯定的感情を引き出す¹¹⁾などが報告されている。LHIは特に高齢者理解のための有効な教育方法として報告されており、学生の高齢者イメージの好転¹²⁾、学生の高齢者理解の深まり⁸⁾のほか、高齢者が語ることで人生の出来事の価値や意味を自覚し、感情の安定や心理的安定がもたらされる¹³⁾ことなどが20件報告されている(2021年12月21日時点)。これらの報告結果から、地域に暮らす人の語りをじっくりと傾聴し、「話し言葉」でそれを書くという『聞き書き』を教育に取り入れることは、「「個」の理解と個別的な看護実践を行う力を養う」という目標の達成につながるのではないかと考えた。本稿では、演習による学生の学びについて質的に分析し、『聞き書き』を取り入れた演習プログラムが、学習目標を達成するために適切な方法であったのか評価したので、その結果を報告する。

2. 方法

2-1. 演習プログラムの概要

演習の目標は、『聞き書き』を通して地域に住む人びとの人生史の一部を知り、「その人らしさ」「価値観」をもつ「個」を理解し、個別的な看護を実践するための対象理解の力を養う」とした。演習プログラムは、科目担当者間で議論を重ね、講義(ナラティブ・アプローチと『聞き書き』についての説明)、学外演習、学内演習(グループワーク)で構成した。演習実施時期は「地域・在宅看護学Ⅱ」(3年次必修、83名履修)の開講期間中の2021年4月末から5月中旬とした。新型コロナウイルス感染拡大下で、地域に住む人々の話を聴く機会を得ることが難しいことから、『聞き書き』の対象者は身近な人(両親、祖父母など)とした。科目担当者間で『聞き書き』のテーマは「思い出の味」とした。話をしやすいテーマであり、語りの中から、食物の味や栄養というものだけでなく、人や食べ物との関係性、生産者や料理を作った人、地域の風習、時代背景、生活背景なども関わってくると考え、本テーマを選定した。講義の後、学外演習とし

て学生一人ひとりが、人生を重ねてこられた家族のお一人に話を聴き、それを「話し言葉」として書いて冊子にまとめるものとした。冊子化に必要な用紙や書類とじなどを予め配布した。演習の最後に、学内演習でグループワークを行い、『聞き書き』の体験と冊子にまとめた『聞き書き』の内容を共有し、語り手の人生史を理解し「その人らしさ」「価値観」を理解できたかどうか、振り返る機会を設けた。履修生 83 人の『聞き書き』の対象者は、祖父 8 人 (9.6%)、祖母 30 人 (36.1%)、父親 9 人 (10.8%)、母親 36 人 (43.4%) であった。また、グループワーク後に全体で、「学び」や「気づき」に関するグループ報告会を行った。グループ報告会終了 7 日後にリフレクションペーパーの提出を求めた。

2-2. 演習の評価方法

演習評価への協力の承諾を得られた学生 81 人 (履修生の 97.6%) の「演習評価アンケート」(著者らが作成した質問項目から成る)(計 5 問、5 段階リッカートスケール)と、学生のリフレクションペーパーを評価方法に用いた。リフレクションペーパーは、以下の 2 つの内容を問うものとした: ①「その人らしさ」「価値観」について考えたことを書いてください、②「この演習での学びを、実際にどのように役立てていきたいと思いませんか」。

演習評価アンケートは単純集計を行い、リフ

レクションペーパーは学生の学びや気づきについて、質的帰納的に分析した。リフレクションペーパーから、『聞き書き』を通じた学びや気づきを示す文節を抽出しコード化したのち、コードの内容を吟味し、抽象度を高めながら、サブカテゴリ、テーマへと分類した。

2-3. 評価における倫理的配慮

「地域・在宅看護学Ⅱ」の履修生には、科目の最終講義日に、文書と口頭にて評価の意義と評価方法を説明し、リフレクションペーパーを演習の評価に用いることに同意を得られた学生に、「演習評価アンケート」を提出してもらうよう説明した。同意の有無は成績と一切関係なく、断っても不利益を受けることはないことを説明した。「演習評価アンケート」およびリフレクションペーパーの分析は、個人が特定できないように匿名処理したうえで、科目の評価判定終了後に行った。

3. 結果

3-1. 演習の有用性に関する主観的評価

演習評価アンケートの 5 つの質問への回答から、ナラティブ・アプローチの方法の一つである『聞き書き』を取り入れた演習について、学生の主観的評価を得た (図 1)。問 1 の「相手の人生史の一部を理解するうえで役だったかどうか

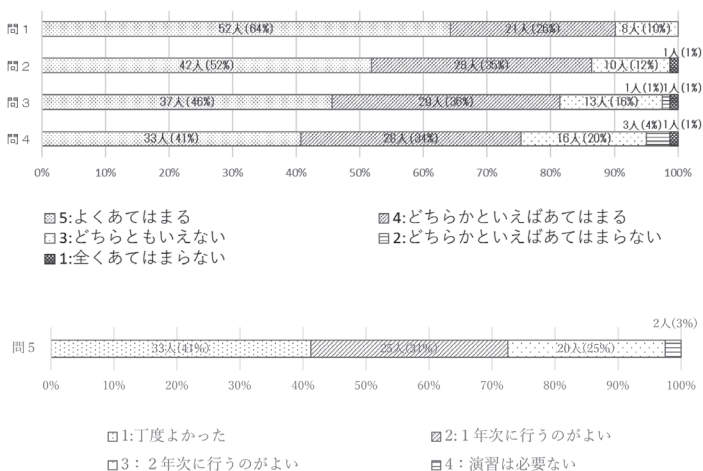


図1 授業評価アンケート結果

か)については、「よくあてはまる」と回答した人が52人(64%)で、「どちらかといえばあてはまる」と併せると全体の9割であった。問2の「相手の「その人らしさ」「価値観」を理解するうえで役だったかどうか)については、「よくあてはまる」と回答した人が42人(52%)で、「どちらかといえばあてはまる」と併せると全体の8割を超えていた。問3の「今後、地域に暮らす人びとの個別のニーズと必要な看護を考えていくうえで役立つかどうか)については、「よくあてはまる」と回答した人が37人(46%)で、「どちらかといえばあてはまる」と併せると全体の8割を超えていた。問4の「『聞き書き』を取り入れた演習の必要性)については、「とても必要である」と回答した人が33人(41%)で、「どちらかといえば必要」と併せると全体の約8割であった。また、問5で『聞き書き』を演習で行う時期について聞いたところ、「ちょうどよかった」と回答した人が最も多く、33人(42%)であった。次いで、「1年次に行うのがよい」と回答した人が多く、25人(31%)であった。演習自体必要がないと回答した人は2名(3%)みられた。

3-2. 演習を通じた学生の学びや気づき

リフレクションペーパーの分析の結果、演習を通じた学びや気づきを示すコードは640抽出され、最終的に演習による学びや気づきに関連する2つのテーマ：[[個]の理解][看護観の深まり]と、それぞれのテーマを構成するカテゴリ、サブカテゴリへと分類した(表1-1、表1-2)。本項では、テーマを[]、カテゴリを<>、リフレクションペーパーの記述を「」で表した。各カテゴリには、そのカテゴリを説明するサブカテゴリが抽出された。

1) [[個]の理解]

『聞き書き』で語り手とのやり取りを通して、学生は「個」としての人間に対する理解を深めていた。[[個]の理解]に関する学びや気づきを表したカテゴリは、<受け継がれて今に至る、一人ひとりの背景の多様性を知る><その人への関心と深い対象理解がもたらされる><「その人らしさ」を形成するものに気づく><一人ひとり異なる存在であるということに気づく>の4つが抽出された(表1-1)。

<受け継がれて今に至る、一人ひとりの背景の多様性を知る>

このカテゴリは2つのサブカテゴリ4つのコードから構成された。学生は『聞き書き』を実際に行うことで、自分と『聞き書き』の対象者(以下、語り手とする)の生きて来た時代背景や生活背景の違いを具体的に知り、自分とは異なる語り手の生きて来た時代や生活背景の理解が深まっていた。また語り手の内容には、しばしば語り手の親世代のエピソードが登場していたことで、人から人へ受け継がれてきたものについての理解が進み、世代を超えて伝承されていることの価値に気づいていた。

<その人への関心と深い対象理解がもたらされる>

このカテゴリは3つのサブカテゴリと5つのコードから構成された。身近な人を対象に『聞き書き』を行うなかで、語り手のこれまで知らなかった側面を知り、内面理解を深められたと感じる経験をしていた。またそのことで、自分とも他の誰とも違う語り手について、もっと知りたいといった関心の高まりを認識していた。

<「その人らしさ」を形成するものに気づく>

このカテゴリは4つのサブカテゴリと6つのコードから構成された。学生は『聞き書き』を行ったことで、「その人らしさ」とは何かについて考え、何が「その人らしさ」なのか、何が「その人らしさ」をつくっているのかということを考えていた。学生が認識した「その人らしさ」とは、話ことばや話し方であり、価値観であった。そして、子ども時代から現在に至るまでの、生きて来た時代や生活の背景、地域や関わった人びとなどその人を取り巻く環境、経験してきたあらゆることが、現在の「その人」をつくっていることについての気づきを得ていた。

<一人ひとり異なる存在であるということに気づく>

このカテゴリは1つのサブカテゴリ4つのコードから構成された。学生は『聞き書き』を通して、自分とも他の誰とも異なる価値観や考え、感じ方をもつ「個」の存在に気づき、一人ひとりが誰とも異なる唯一の存在として、価値があるということを学んでいた。

2) [看護観の深まり]

学生は、[[個]の理解]をしながら、看護職

者としての自分に結びつけて考えており、看護師としてどのように対象とする「個」に向き合えばよいか考えながら、看護観を深めていた。[看護観の深まり]に関する学びや気づきを表したカテゴリは、〈一人ひとり異なる対象を理解するために必要なことに気づく〉、〈「個」を尊重するということと、その重要性に気づく〉、〈相手が心を開示し語ることでできる関係づくりの重要性に気づく〉、〈そこに共にいることの意味に気づく〉の4つが抽出された(表1-2)。

〈一人ひとり異なる対象を理解するために必要なことに気づく〉

このカテゴリは3つのサブカテゴリと4つのコードから構成された。その人を理解するために、「その人らしさ」を形成している時代や生活背景、その人のこれまでの経験に目を向け、それを言葉で分かち合うことを通して理解しようとするのが、総称される「患者」ではなく、一人ひとりを異なる「個」として対象を理解するために必要であることを学んでいた。また、そのためにも深い関心を持ち続け、相手のことを観察しながら、注意深く聴く姿勢が重要であるとの気づきを得られていた。

〈「個」を尊重するということと、その重要性に気づく〉

このカテゴリは3つのサブカテゴリと8つのコードから構成された。学生は「『個』の理解」の習得をしながら、唯一の存在としての相手を敬い、これまでの人生を包含する「個」として尊重する必要性に気づいていた。そして、自分の固定観念や価値観を通して相手を判断したり、評価したりするのではなく、たとえ自分と大きく異なり相容れなくても、相手のありのままを受け入れる姿勢が看護師には重要であると考えているに至っていた。

〈相手が心を開示し語ることでできる関係づくりの重要性に気づく〉

このカテゴリは1つのサブカテゴリと2つのコードから構成された。学生は語りを引き出すためには、安心して心を開き話せる相手である必要があり、相手が安心して話せる物理的環境と雰囲気築く必要があることに気づいていた。そのために必要な姿勢や話し方についても振り返り、今後に生かしていこうと考えていた。

〈そこに共にいることの意味に気づく〉

このカテゴリは2つのサブカテゴリと3つのコードから構成された。学生は『聞き書き』演習で語りを聴く体験のなかで、沈黙を意味のあるものとして捉え直していた。沈黙は語り手にとっては記憶を辿り、人生を振り返るために必要な時間であると認識していた。同時に、聞き手である自分自身にとっての沈黙の時間を、相手を理解しようとするための有意義な時間として体験していた。相手を観察するなかで、沈黙の中に個性を見出していた。

カテゴリとして抽出するに至らなかったが、中には語りを聴いていくプロセスで、「看護とは対象を理解していく過程であり、対象との相互作用により発展していくと思った」(ID11)、「患者のその人らしさや価値観を知ることは、看護を行う上での第一歩であると感じることができた」(ID7)、「その人らしさ、価値観を尊重することができれば、その人の意思を尊重した、一人ひとりに合わせた看護を実践できると考えた」(ID81)のように、『聞き書き』演習の学びを自らの看護観の形成につなげている学生もみられた。

3-3. 演習の振り返りにより学生が認識した『聞き書き』の意義

学生は、自分たちが取り組んだ『聞き書き』演習について、その意義を振り返っていた。

「父らしさや価値観を理解できたのは、父を主体に会話し、話の内容を文字として記録したことで、話した言葉や音だけでなく、文字としても読み取ることができたからだと思う」(ID36)、「(文字に起こされた)その人の話し言葉を(グループワークで他の学生から)聞くことで、その人がどんな人なのか、その人らしさをイメージできた」(ID8)、「グループの人の発表を聞き、今と違った言葉遣いや語尾、話し方からその人のことが良く伝わり、その人を感じる事ができた」(ID66)のように、言葉で語られたことを文字にすることにより、その人らしさの理解につながる、と振り返っていた。そして、グループメンバー間で「聞き書き」の体験と語りの内容を共有したことによって、「地域や個人、さらに同じ年代でも話し方の特徴が異なることが分

表 1-1 「聞き書き」演習を通して学生が習得したこと

テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード
受け継がれて今に至る、一人ひとりの背景の多様性を知る		その人の生きた時代や生活背景を知る	相手が生きて来た時代背景や生活背景への理解が深まる 相手と自分の生きた時代背景、生活背景の違いを知る
		世代を超えて大切に受け継がれていくこととその価値に気づく	人から人へ大切に受け継がれて来たものに気づく 人から人へ受け継がれることのすばらしさや意義に気づく
その人への関心と深い対象理解がもたらされる		その人の内面についての理解が深まる	その人の胸の内の考えや思いについての理解が深まる その人の価値観や考え方、思いを知ることができる
		知らなかった側面を知ることができる	これまで知らなかったその人の側面に気づく その人のこれまでの生き方から人生観への理解が深まる
		その人の理解への指向性が高まる	その人への関心が高まる
「個」の理解		話ことばや話し方から感じられる個性が「その人らしさ」だと気づく	感じ方や考え方にその人らしさや価値観が表れていると気づく 話ことばや話し方（表情・語り口・方言・話すテンポ・雰囲気）にその人らしさが表れていると気づく
		価値観がその人らしさを象徴していることに気づく	その人の価値観が「その人らしさ」に結び付いていると気づく
		「その人らしさ」を形成するものに気づく	生きた時代や生活背景、取り巻く環境が「その人らしさ」をつくっていると気づく 生きてきた時代背景や環境が「その人らしさ」に影響していると気づく
		その人のこれまでのあらゆる経験が「その人らしさ」をつくっていると気づく	子ども時代からの生活歴がその人らしさをつくっていると気づく これまで経験してきたことがその人らしさや価値観をつくっていると気づく
一人ひとり異なる存在であるということに気づく		自分とは異なる存在としての他者に気づく	他者の価値観や感じ方、捉え方が自分とは異なることに気づく
		一人ひとり多様で異なっており、唯一の存在であることに気づく	それぞれの人で異なる価値観や考えの違いに気づく 人それぞれで感じ方や捉え方が違うことに気づく
			人は多様で唯一の存在であることに気づく

生データ	ID
・どんな場所に住んでいて、どんな環境、状況で育ったか、生活してきたかは、思い出の話を聞くことで想像することができる。	60
・当時の生活背景などが見えてきて、その人らしさやその人の価値観などが語りから読み取れる。	58
・今まで生きてきた年数の違い、祖母が過ごしてきた時代と私が過ごしてきた時代の違いの環境の違いがある。	59
・自分が知らなかった時代のことを知り、今とはこういう風に違うのか、と文化の違いについて学ぶことができた。	72
・価値観やその人らしさは近い人に受けつげられている。	73
・昔の暮らしは繋がりや継承というものを大切にしておりその繋がりという価値観を重要視している。	69
・人から人へ話を受け継ぐことも大切だと考えました。	79
・先祖代々思い出の味が伝承されているのだと感じた。	78
・話し方や表情からその人らしさや思いを汲み取ることができる。	78
・生きてきた時代背景を知ることでコミュニケーションの話題が広がり、よりその人の中身を知ることができる。	70
・話を聴いて、その人らしさ、価値観を知ることができた。	6
・その人の人生史を知り、その人がどんなことを大切にしている、どのような考えかたをする人なのか、知るきっかけになる。	27
・今の家で今までのように暮らすことが母らしさだと考えていたが、実家で暮らすことも母らしさであると思った。	37
・その人の今までは見えていなかった分からなかった意外な一面や思い、考えが見えてくる。	61
・経験談を知ることができ、その人にとっての人生の価値を知ることができた。	77
・過去の生活、生き方が現在の生活、生き方に反映されてきている。	6
・その人の価値観を受け入れることでお話を楽しく聞けただけでなく、その人についてもっと知りたいという興味や関心を持つこともできた。	79
・祖母の話を「聞いていた」のではなく「聴いていた」。すると、不思議とそのような考えもあるのか、ともっと祖母を知りたくなった。	1
・その人の性格や価値観を一度受け入れてお話を聞いてみることで、その人に対して興味や関心がわいてくる。	79
・一人ひとりの感じ方や考え方が「その人らしさ」「価値観」であると考えた。	81
・その人のこだわりや個性が見え、その人らしさや価値観に触れることができた。	20
・一人ひとりの言葉や語り方、間の取り方や空気感などが違い、そういうところに「その人らしさ」が出て来ると考えた。	14
・話しかたや口調はもちろん、話す内容や、話すスピード、表情、ジェスチャーといった、話をする一連の流れ全てにその人らしさが現れる	64
・一人ひとりの感じ方や考え方が「その人らしさ」「価値観」であると考えた。	81
・人にはそれぞれの価値観があり、それはそれぞれその人らしさに結び付いている。	21
・「その人らしさ」「価値観」といった目に見えないものは、その人の幼少期や生活、食、時代、関わった人、物など様々なものから影響を受け、作り上げられているものである。	50
・思い入れや、何がいいかはその人の味わったものや経験したこと、環境・習慣によってその人らしさや価値観は形成されている。	49
・生活歴というその人が大事にしているものは重要であるためそれを知ることで人となり分かり現代の生活に影響を与えていることを学ぶことができた。	69
・子どもの頃の過ごし方がその後の語り手の価値観につながっていると考えた。	14
・子ども時代の過ごし方などが今に影響している	19
・その人の過去の経験は現在的人格形成に大きく影響しており、それらが「その人らしさ」や「価値観」を形成している。	51
・それぞれの人生の一場面に触れただけだが、その人らしさや価値観が盛り込まれていたと感じた。	20
・語り手の生きてきた人生史が現在の語り手をつくる	14
・同じものでも同じことでも私たちが感じる捉え方と高齢者や看護を受ける人の感じ方、捉え方は異なる。	16
・自分と他は違う、これが自分やその人の価値観なのだろうと思った。	72
・この世の中に存在している人の数だけ種類や考えがあることを理解した。	71
・その人が思う「価値観」は人それぞれ違い、十人十色だと感じた。	7
・誰一人として同じ料理や背景を持った思い出の味は存在しないことがわかった。	17
・人それぞれ思い出の味のとらえ方が様々であること	73
・人それぞれ感じ方が違うことを学んだ。	36
・その人にしか話せないものは、その人からしか聞けないものである。	38
・誰一人として同じ料理や背景を持った思い出の味は存在しないことがわかった。	17

表 1-2 「聞き書き」演習を通して学生が習得したこと

テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード
一人ひとり異なる対象を理解するために必要なことに気づく		その人の時代や生活背景を知り理解しようとする	その人の時代や生活背景、生まれ育った環境に目を向け理解しようとすることで対象理解ができると気づく
		その人のこれまでの人生経験と思いを共有する	その人のこれまでの経験や体験を言葉で分かち合うことが対象理解につながると気づく
		その人に深い関心を向ける	その人の話に注意深く耳を傾ける積み重ねが対象理解につながると気づく その人のことをよく観察することが対象理解につながると気づく
看護観の深まり	「個」を尊重するということと、その重要性に気づく	その人に敬意を払う姿勢が大切であると気づく	その人に関心を持ち、知ろうとする努力が大切であると気づく 敬意をもって相手の話を聴く姿勢が大切であると気づく
		これまでの人生を包含する「個」を尊重することが重要であると気づく	これまでの人生をふくめてその人をとらえ、看護に活かすことが大切であると気づく その人が大切にしてきたことや今も大切にしていることを尊重して看護を行うことが重要であると気づく
		相手の話1つ1つに耳を傾けて、相手の思いを尊重したかかわりをするのが大切だと気づく	相手の話1つ1つに耳を傾けて、相手の思いを尊重したかかわりをするのが大切だと気づく
相手が心を開示し語りのできる関係づくりの重要性に気づく	相手が安心して心を開いて話せる関係づくりが大切	自分の価値観や固定観念に拠らずその人のありのままを受け入れることの重要性に気づく	その人のこれまでの人生を肯定し、その人のありのままを受け入れることの重要性に気づく 理解や共感できなくても、その人らしさや価値観をなくさせないことが大切であると気づく
		自分の固定観念や価値観に拠らず相手を理解しようとすることの重要性に気づく	自分の固定観念や価値観に拠らず相手を理解しようとすることの重要性に気づく
		安心して心の内を話せる関係づくりが大切であると気づく	安心して心の内を話せる関係づくりが大切であると気づく 安心感を得られる環境と雰囲気づくりが大切であると気づく
そこに共にいることの意味に気づく	相手と自分にとっての沈黙の価値に気づく	ただそこにおいて時間を共有することの大切さに気づく	沈黙は相手にも自分にも有意義なものであることに気づく 「その人らしさ」が存在する沈黙の時間の価値を見出す
			相手との時間を共有する

生データ	ID
・その人がどのように生き、何を感じて来たのか、その核となる部分に触れ、ともに感じるという相互行為がよりその人らしさ、価値観を理解することにつながる。と考えた。	11
・その人の歴史を知ることでその人らしさやその人の価値観の理解につながる。	49
・生活背景やその人の歴史・対象者の生まれてきた時代を知ることで、人物を捉えやすくなると感じた。	80
・その人についてや、その人の時代背景や家族構成について知ることができ、このようにお互いで話し合っという機会が改めて大切な場であるということを感じた。	62
・ピースのように1つ1つその人にもつかわる話を聴くことで、その人らしさや価値観を組み立てていくことができると思った。	35
・相手の話に興味をもち、聞く姿勢を持つことで相手からの話もどんどん引き出されると感じた。	79
・話の内容だけでなく、間や表情、話し方など着目すると、対象の感情も読み取ることができると考える。	58
・その人の人生を知ることで、ケアの仕方も変わってくるので、相手をよく観察し、言語的・非言語的な面から相手の気持ちを理解していきたいと考える。	40
・その人らしさや価値観を知ろうとする努力は個別化された看護を実践するためだけでなく、1人の人間としてもとても大切なこと。	5
・「その人らしさ」と「価値観」は誰しも異なるものを持っていることから、関わる人としてその人を理解しようと、知ろうという姿勢が必要であると感じた。	50
・その人に関心を持つこと、尊重し、敬う気持ちを忘れないことをどんな場面でももち続けることは大切である。	66
・語り手に敬意を持つこと、そして、耳で聴くだけでなく、心でも話を聴き、自分にしか聞けない話を、今しか聞けない話を聴くことが大切だと感じた。	33
・看護師として、学生としてなど、その人との関係を表す名称を抜いて、私という一人の人間としてその人を知りたい、知ろう、という気持ちを持ち、教えて頂くことを大切にすべきだと思った。その人に関心を持つこと、尊重し、敬う気持ちを忘れないことをどんな場面でももち続けることは大切である。	66
・患者さんが体験してきた人生や大切にしてきた生き方などの理解が加わることで、より患者さんとの関わり方や接し方が良いものになる。今だけに目を向けるのではなく、今を作り出しているということに重要な過去にまで視野を広げ理解をしたい。	74
・話を深く聴くことでその人に何が重要なのか知ることができ、その人らしい看護を提供することができる。	16
・その人が大切にしているコト・モノで考え、治療ばかりを優先して考えるのではなく、その人の生活をマッチさせてケアプランを立てていくことが在宅で重要になってくると私は感じた。	53
・価値観やこれまで大切にしているものを尊重した看護や、個性を生かし、その人がその人らしく人生を送るために、何が重要なのかを見極め、必要な情報やケアを提供し、一緒に疾患や障害を向き合っているような看護師になりたい。	70
・その人が大切にしていることは何か、その人らしく生活するためにはどうすると良いのか理解することが必要だ。	61
・その人の人生の一部であるので、その人にとってどのような意味があるのかを相手のペースに合わせて話を聴けるようにしたい	10
・過ごしてきた人生、その人の大切にしているもの、こと。それを看護師として理解し、受け止め尊重していくこと。	59
・「その人らしさ」「価値観」を知れば、その人が大切にしていること、してきたことが少しでも分かり、その人らしい生き方や生活の継続や実現の看護の実践につながる。と考えた。	52
・語り手の一言一句傾倒し、ありのままを受け止める姿勢の重要性、語り手の胸の奥にある豊かな感情を引き出すことができる。	39
・自分の価値観を入れず、対象者の伝えたいことや感情をありのまま受け取ることの重要性を学んだ。	6
・その人らしさや価値観は、必ず皆が理解して共有しあわなければならないことではなく、分かり合える人もいるし、分かり合えない人もいることを理解し、皆のその人らしさや価値観をなくさないようにしなければならなかった。	36
・自分の立場や専門性を棚上げにする態度をとることで語りを引き出す。	3
・実際に人の価値観は多種多様であることを念頭に置いて、固定観念を捨てて対象者の価値観から本当のニーズを把握する。そしてそのニーズを看護ケアに取り入れることで、その人らしい看護につなげられるように役立てたい。	6
・個別化された看護を実践するためには、自分の考えや価値観だけで判断せず、多方面から患者さんのことを考え、理解することができる力が必要不可欠だと思う。	1
・自分の過去や思い出を話すことは、誰に対してもできるものではないので、この人なら話しても大丈夫と言う安心感を与えられるような環境や信頼関係づくりが大切になってくる。	42
・語る人に耳を傾け、安心して話せる環境づくりがとても大切である。	2
・人と関わる際には、相手に聞かせていただいている意識を持ち、プライバシーの配慮、相手が話しやすい環境をつくる、話し方(相づち・傾聴・話すペース・言葉遣い)などを考えて接していきたいと感じた。	55
・患者が聞きたいことを聞きたいときに聞けたり、話したいときに気軽に話すことができる環境づくりは看護師の重要な役割の1つである。	67
・沈黙は聞き手が話し手の感情を尊重したこと、話し手が聞き手のこの環境に安心感を抱いたことによる現象だと感じた。	20
・その人から語られたことにとどのような意味があるのだろうか、どのような意味づけがなされているのだろうか。と考えることで、相手が話すのを待つ時間を感じなかった。沈黙は気まずいものではなく、相手をより深く理解することにつながるものだと思えた。	10
・沈黙は話し手の感情や聞き書きの環境が作り出したものであり、その人らしさを感じる部分でもあった。	20
・沈黙の時間も、その人の個性だと判断し、「待つ」という姿勢を持つことが大切である。	78
・穏やかな時間をお互いが共有できたことは、良い関係を保っていくことに重要になる。	80
・(沈黙について) 考えてもらう時間の沈黙が嫌な時間ではなかった。その時間を共有する大切さを知った。	30

かった」(ID30) などのように、様々な人を理解する機会となっていた。一方で、「聞き書きは誰にでもケアの力を発揮しない」(ID56)、「相手の状況を省みずに聞き書きを行うと、却って相手に苦痛を与えてしまう可能性がある」(ID57) のように、互いに意義のあるものとなるためには、聞き手の姿勢や聞き手との関係性が重要であると気づいていた。

また、自分自身から語り手に視点を移し、「患者や家族が頭の中を整理する上で有用だと考えた」(ID37)、「語り手も過去のことを振り返ることで、自分のそれまでの軌跡を振り返ったり整理できたりすると思った」(ID67)、「人生の振り返りができて、思い出や過去の記憶に親しむことができる」(ID39)、「話を聞いてもらえてうれしい」という話があり、話を聴くことがケアになると感じた」(ID8) などのように、語り手にとっての意義についても考えられていた。

4. 考 察

アンケートとリフレクションペーパーの内容分析の結果から、『聞き書き』を取り入れた演習プログラムは、「『個』の理解と個別的な看護実践を行う力を養う」という目標を達成する方法として、適切であったと考えられた。実施時期については、アンケートの結果「1年次に行うのがよい」と回答した人が3割いたことや、対象理解を到達目標に掲げる「基礎看護学実習」が2年次に行われることから、1年次に行う意義を検討する余地があると考えられた。

学生は、語り手が「思い出の味」にまつわる過去の記憶を辿り、人生を振り返る時間を共有する中で、語り手の様子や語りを通して過去の記憶や思い出を共有していた。[『個』の理解]のカテゴリ、サブカテゴリに表されたように、学生は語り手の様子を、「その人らしさ」や「価値観」を意識しながら観察し、語りに注意深く耳を傾けたことで、「その人らしさや価値観」が、これまでの人生経験の積み重ねの結果構築されたものであり、自分とは異なる生活歴・環境、時代背景、関わってきた人びとなどの影響を受けていること、「その人らしさ」とは何なのかということに気づいていったと考えられた。グルー

プワークで『聞き書き』を共有し、他の学生が聴いた語りを話し言葉で読むことにより、「語り手」一人ひとりの違いを理解し、それぞれの語り手が唯一無二の存在としての「個」であることの気づきへとつながったと考えられた。また学生は、[看護観の深まり]のカテゴリ、サブカテゴリに表されたように、語り手と自分の相互作用によって、深い話が引き出された自分のコミュニケーションを振り返り、看護の対象と向き合う上で必要な姿勢や、個別性のある看護を実践する重要性とそのため看護職者がどうあるべきかということについて、考えを深められていた。そして、『聞き書き』の体験の最中に遭遇した、「沈黙」の中にも意味を見出し、語り手が人生を振り返る時間として必要であると考えられただけでなく、自身も語り手を理解するために有意義な時間であったと振り返っていた。

このような、『聞き書き』の体験についての意味づけは、事後にグループワークで他の学生と体験を共有し、相互に学びを深めながら行われたと考える。今回、経験学習理論¹⁴⁾を応用した意図的な教育は行わなかったが、学生は他の学生からフィードバックをもらうことで自己の行為を振り返り(リフレクション)、経験学習が行われた可能性が考えられた。経験学習は、経験を知に変換するだけでなく、学生に深い自己理解を促すことも期待できる¹⁵⁾。自己理解の深まりは、他者の容認・他者理解につながり、このことが相手の認識を予想しながら働きかけるという、いわゆる立場の返還を容易にする1つの方法論に関連し、最終的に実践レベルに影響を与える¹⁶⁾とされる。したがって、今後この演習プログラムを行ううえで、経験学習理論を応用し学生の経験が知的に導かれ処理されるように¹⁷⁾学習を支援することが課題と考えられた。

今回の演習で行った『聞き書き』の対象は身近な親や祖父母などであったため、地域に住む人びとのこととして一般化して考えられるか懸念された。しかし、リフレクションペーパーの内容分析の結果、学生は身近な人への『聞き書き』を通して、過去からの連続性をもった存在として、その人のありのままの姿を捉えようとする体験をしていた。親や祖父母などの身近な人に限らず、「個」とはどのような存在なのかという

ことや、そのような存在としての対象理解の視点などを、一般化して考えられていた。看護基礎教育実践では、高齢者理解のために『聞き書き』やLHIを行ったとの報告が多くみられが¹⁸⁾、主に高齢患者や施設入所高齢者が対象とされ、高齢者理解や高齢者のイメージ(先入観)の肯定的変化を促すと報告している。しかし、今回この演習の『聞き書き』の対象者の半数は父親もしくは母親であったことから、時間的連続性のなかで経験を積み重ねた人生史を有する「個」を理解し、個別的な看護実践能力を高めるうえで有用な教育方法として、高齢者理解の目的に限定的なものではないと考えられた。

5. 結 語

学生が学んだこととして、2つのテーマ、8つのカテゴリとして抽出された。学生の学びや気づきの内容から、演習プログラムは学習目標を達成する方法として適切だったと考えられた。『聞き書き』を取り入れた演習は、時間的連続性のなかで経験を積み重ねた人生史を有する「個」を理解し、個別的な看護実践能力を高めるうえで、有用な教育方法と考えられた。また、グループワークでフィードバックをもらうことで自己の行為を振り返り、経験学習が行われた可能性が考えられた。

本稿では、『聞き書き』の対象者の承諾を得られていないため、対象者の語りの内容分析や、学生の学びと『聞き書き』の内容を関連づけた分析は行えなかった。聞き方などと学び・気づきの関連についての検討は、今後の課題と考える。

文 献

- 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書 .2019; Available from: https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tc5425&dataType=1&pageNo=1 (2021年10月30日引用)
- 野口裕二：物語としてのケア。医学書院，東京，2003; pp15.
- 小田豊二：聞き書きをはじめよう。木星舎，福岡，2012; pp6-8.
- (株)りんゆう観光：ウェブマガジン カムイミンタナ第106号。2001； Available from: <http://kamuimintara.net/detail.php?rskey=106200109z02> (2021年10月30日引用)。
- 若林明子：「あなたの言葉を遺したい」患者に寄り添う聞き書き看護師。2018； Available from: <https://news.yahoo.co.jp/byline/wakabayashitomoko/20180929-00097514> (2021年10月30日引用)。
- (株)九州医事新報：にのさかクリニック 二ノ坂保喜院長に聞く 今一度、在宅ホスピスの原点を考える 2014年5月号 .2014； Available from: <https://k-ijishinpo.jp/old/article/2014/201405/001385.html> (2021年10月30日引用)。
- NPO法人白十字在宅ボランティアの会：聞き書きボランティア講座。不明； Available from: <https://www.hakujuji-net.com/hear-write> (2021年10月30日引用)。
- 尾崎章子，齋藤美華，東海林志保：老年看護学教育にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習成果。東北大医保健学科紀要，2016; 25(1): 39-45.
- 荒木さおり，伊藤智子，加藤さゆり他：認知症高齢者に対する「聞き書き」による看護学生の実習での学び。島根県立大学出雲キャンパス紀要，2019; 15: 25-33.
- 駒谷なつみ，大津美香，木浪麻里他：高齢者への聞き書きを通して看護学生が学んだこと。保健科学研究，2017; 8(1): 33-40.
- 大津美香，黒坂菜美，菅原育美他：「聞き書き」を受けた高齢者による臨地実習の主観的評価。保健科学研究，2019; 10(1): 77-86.
- 畑野相子，蓑原文子：高齢者看護学実習におけるライフインタビューと高齢者理解との関連—高齢者イメージとエイジズムの変化の分析。滋賀医科大学看護学ジャーナル，2013; 11(1): 23-27.
- 吉原悦子，丸山康子，金子由里他：老年看護学実習においてライフストーリーを聞くことによる学生の学び。西南女学院大学紀要，2021; 25: 13-21.
- Kolb DA. *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*. 2nd Edition ed. New Jersey: Pearson FT Press. 2014.
- 田村由美：看護の教育・実践にいかすりフレクション。南江堂，2015; 65-66.
- 赤星誠：自己理解を目的に構成的エンカウンターおよびグループワークを試みて。精神看護，2001; 4(5): 96-100.
- 安酸史子：経験型実習教育。医学書院，東京，2015; pp36-37.
- 加藤和子，窪内敏子，福田裕一他：高齢者を理解するために生活史を用いた教育に関する検討。日本赤十字豊田看護大学紀要，2018; 3(1): 131-137.